

1947-11-26
11-8

井田書院

卷之三
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

97-8-10

364

[illegible]

(通信面)

我身心の熱甚しけれハ炎暑の

候も熱ならず、身心ハ寒暑よりも

寒暑なり、社会人道復活

に付、篤く御高見を蒙り厚く

此一事二付、先ツ御教訓を

請へ奉らん、近日参上仕候。

(宛先面)

巢鴨養育院の西隣

新井奥彦様

二十六日*

日本橋途上田中正造

* (後筆) 「廿九日午刻永嶋君、三十日午前

より工富夫妻君、三十一日、九月一、二、三、田中君」

を經て明治三十六年十二月私塾講和會を建立する。大正十一年(一九二二)六月十六日没。七十七歳。弟子に中村千代松、永島忠重、中村旧姓布施秋三郎、布施現之助、渡辺英一、加藤啓介、佐藤政次郎(在寬)、江渡秋嶺、柳敬助、大山幸太郎、山川三郎、岡通、工藤運太郎らがいる。田中正造もふらりと講和會を訪れ精神的影響を受けた。新井の説くキリスト教にある父母神思想や万人救済思想、ならびに神秘主義的思想と福音主義的信仰との関連、また儒學思想など、少しずつ解明されてきている。

〔備考〕 著本秀史「新井興選の人と思想—人間形成論—」(二六六、大明堂)、コイル・ダニエル・金泰昌編「新井興選—公共する人間—」五、三〇三、東京大学出版会

〔著本 秀史〕

『明治時代史大辞典』

(吉川弘文館 二〇一三年)

あらいうすい 新井興選 一八四六—一九二二 宗教教育家。本名常之進。弘化三年五月五日(一八四六年五月二十九日)、仙台藩に生まれる。藩校養賢堂、華昌館、安井塾の三計塾に学ぶ。戊辰戦争の明治元年(一八六八)十月、仙台鎮兵隊の一員として箱館に向かう。箱館にて沢辺琢麿を介してニコライに会い、はじめてキリスト教に接す。明治三年十二月、森有礼の少弁務としての米国行きに随行してサンフランシスコに向かう。森の紹介で神秘主義的キリスト者トマス・レイク・ハリス Thomas Lake Harris に会う。ハリスの新生社 Brotherhood of the New Life で二十八年間過ごし、明治三十二年(一九一九)八月帰国する。四年間の流寓生活を經て明治三十六年十二月私塾講和會を建立する。大正十一年(一九二二)六月十六日没。七十七歳。弟子に中村千代松、永島忠重、中村旧姓布施秋三郎、布施現之助、渡辺英一、加藤啓介、佐藤政次郎(在寬)、江渡秋嶺、柳敬助、大山幸太郎、山川三郎、岡通、工藤運太郎らがいる。田中正造もふらりと講和會を訪れ精神的影響を受けた。新井の説くキリスト教にある父母神思想や万人救済思想、ならびに神秘主義的思想と福音主義的信仰との関連、また儒學思想など、少しずつ解明されてきている。

066 田中正造 1841-1913 政治家、社会運動家。下野の百姓として生まれた。幕末に名主となり、領主六角家の苛政に抵抗。自由民権運動のなかで栃木県会議員となり、県令三島通庸の暴政と闘った。1890年に衆議院議員に選ばれ、以後6度連続当選。足尾鉾毒問題と取り組み、1901年、議員を辞したのち、天皇に直訴した。1900年頃キリスト教に接し、02年に獄中で初めて新約聖書を読み、鉾毒問題の犠牲となった谷中村の復活を求めて活動を開始、「キリストハ真理実践」と記して、彼自身その実践に努めた。河川踏査中病で倒れたとき、袋中からは新約聖書と帝國憲法があった。日記絶筆には「悪魔を退ける力なきものゝ行為の半ハ其身モ亦悪魔なれハなり」として、懺悔洗礼を要すと記していた。

〔清水靖久〕

『岩波キリスト教辞典』

〔2002年〕

067 新井興選(新?) 1846-1922 教育者、仙台藩の生まれ。藩校養賢堂、安井塾の三計塾に学ぶ。戊辰戦争では奥羽越列藩同盟に参加、榎本武揚軍に加わり箱館に逃れる。箱館でニコライを知り、キリスト教に初めて接する。1871年森有礼の随員として渡米。T. L. ハリスの新生社で暮らす。99年帰国。1903年講和會を寄贈されて門弟の育成、指導にあたる。渡辺英一、佐藤在寬、永島忠重、中村秋三郎、大山幸太郎らの門弟がいる。また、田中正造や高村光太郎にも強い影響を与えた。新井の到達した最深のキリスト教思想は万人救済観である。父母神信仰を核とするそのキリスト教思想はこれからの解明が待たれる。

〔榎本秀史〕

『岩波キリスト教辞典』

〔2002年〕

あらいうすい 新井興選 1846.5.29(弘化3.5.5)-1922.6.16 仙台藩士。本名常之進、興選は号。藩校養賢堂に学び、1866(慶応2)年藩より江戸遊学を命じられ、安井塾の塾に入る。維新政府成立による混乱のなか、68年仙台に戻り、玉田左太夫らを助け維新政府に対抗する奥羽越列藩同盟結成画策にあずかる。同年9月仙台藩が降伏したため、*金成善左衛門らと脱藩、榎本武揚の艦隊に搭乗して函館に赴き、*沢辺琢麿と出会い、ニコライを紹介されてキリスト教に接する。69(明治2)年仙台で榎本軍の兵隊を企て、金成と房州に赴くが、5月榎本降伏によりその計画は頓挫。ふたたび同年冬に仙台へ短期間戻った後、東京に赴き、再度ひとりで帰仙して*小野莊五郎、*花川定吉らに会い、「世道人心を維持する」にはキリスト教をもつてなすと語る。70年1月函館に渡り、ニコライの留守をあずかる沢辺と賛歌聖書を讀んでキリスト教を研究。同年10月、彼を追って函館にきた小野と共に仙台に帰って伝道した後、東京に赴く。金成の就旋で米国在留少弁務官*森有礼と面談、直ちに随行員に選ばれ、12月横浜を出帆。71年春、森が67-68年に通した*ハリス、T. L. を枢軸とする新生社(Brotherhood of the New Life)に入る。75年、ハリスがニューヨーク州プロクトンからカリフォルニア州サンタローザに移る際、長沢鼎らと同行。ハリスに従い、キリストの教義を目指す生活に励む。99年8月無一物で忽然と帰国。東京在住の甥、知人宅に寄寓後、1903年12月平沼延次郎が寄贈した巢鴨の講和會に住み、門人たちの指導・育成に生きた。その中には*田中正造がいた。著述には、邦文の『読者誌』(02)、『興選語録』(06)、英文の *Inward Prayer and Fragments* などがある。〔文獻〕永島忠重編『興選伝説』5巻、1930-31・永島忠重[新井興選先生]1933; H.W. Schneider, G. Lawton "A Prophet and A Pilgrim" 1942; 林竹二「森有礼研究」(『京大文学部研究年報』15-16)1967-68. (著本秀史)

『日本キリスト教歴史大事典』

(教文館 1988年)

たなかしょうぞう 田中正造 一八四一—一九二三 政治家、足尾銅毒反対運動指導者。天保十二年十一月三日(一八四二年十二月十五日)、下野国安藤郡小中村(栃木県佐野市)に、父豊蔵・母サキの長男として生まれる。幼名は兼三郎。祖父兼造の代から旗本六角家領の名主をつとめる家柄であったが、「中等の財産」にすぎなかった。弘化四年(一八四七)ごろより、儒後福山藩出身の儒者赤尾小四郎の塾に学ぶ。父豊蔵の割元就任後、安政四年(一八五七)十七歳で名主に就任する(十九歳説もある)。青年期の正造は、農作業にそしむかたわら藍染商も手がけるなど、勤勉な毎日を送る。熱心な富士講の信者でもあった。平田国学にも入門しているが、詳細は定かでない。文久三年(一八六三)、大沼清三郎の次女カンを結婚。慶応元年(一八六五)から四年にかけ、六角家の租税に対し、旧慣温存や主君交番を求めて農民たちの先頭にたつて闘い、捕らえられて入牢。明治元年(一八六八)十一月に釈放されるとともに領分追放となる。『田中正造書話』の「十月二十日」入牢説は正造の誇張である。明治二年ごろより正造と名乗る。三年三月に上野原の「附屬捕」となり、花輪分庁勤務を命ぜられ鹿角に赴任する。四年二月、上司木村新八郎暗殺の犯人に疑われ逮捕、投獄され

日本抗法や鉾毒条例の正当な行使を政府に迫る。日露戦争に際しては、朝鮮東洋農民の戦いに深い理解と同情を示す。明治二十九年秋、渡島瀬川の大洪水によって鉾毒被害が拡大・深刻化すると、鉾毒問題に専念するようになる。このころより、被害民が独自に行なった被害地の生死調査や母乳欠乏調査などによって浮かび上がった死産や早産する子どもの多さに愕然とし、鉾毒による死者を「非命の死者」と形容するようになる。明治三十二年(一八九九)三月六日、第十三回議会で議員歳費値上の反対演説を行い、四月十九日に歳費減退案を提出する。二十三年二月十三日に発生した川俣事件に大きな衝撃を受け、議会で政府を厳しく追及すると同時に、「亡国に至るを知らざれば之れ即ち亡国の機につき質問書」を提出し、有名な「亡国」演説を行う。三十四年十月二十三日に議員辞職願を提出、十二月十日には天皇に直訴して世論に大きな衝撃を与える。三十七年七月末、正造は遊水池の対象とされた谷中村(栃木市)買収に反対する運動を組織するため、単身で谷中村に移り住む。日露戦争前に非戦論を唱え、日露戦争とともに日本が率先して軍備全廃するよう主張。明治四十年(一九〇七)、十六戸の残習民の家屋が強制破壊されたが、透見泰吉や木下尚江らの援助を受けながら、残習民とともに遊水池化反対運動を継続する。その後、谷中村遊水池化計画が根本的解決にならないことを実証しようとして、大小枝川に至るまでの河川調査活動を実施。その移動距離は一〇〇〇キロを僅に超えた。正造は、人間が科学技術の力を「悪用」して自然を破壊することの「愚」をとり、「万物の奴隷」として自然と共生する生き方をよしとするようになった。また、晩年の正造はキリスト教に深く傾斜し、新井鳳楼と精神的交流を求め、さらに岡田豊二郎の静陸法も実践した。大正二年(一九一三)、河川調査活動の途中で栃木県足利郡吾妻村(佐野市)の鹿田清四郎宅に倒れ込み、そのまま臥床し、九月四日に死去した。七十三歳。死因は胃ガンとさ

激しい拷問を受ける。入獄中、『西国立志篇』などの西洋近代思想に接する。嫌疑がはれて七年五月に釈放。地租改正に担当人として従事する。西南戦争後、政治家をめざす決意をし、「一身もつて公共に尽くす」覚悟を固める。明治十二年(一八七九)、再刊された『栃木新聞』に編輯人として参加し、「国会を開設するは目下の急務」を掲載。十三年二月、補欠選挙で県会議員に当選。安藤結合会(のちの中郷社)の一員として国会開設運動に熱心に取り組み、選白書記兼委員として第二回国会期成同盟大会に出席。栃木県を代表する自由民権運動家として名を馳せる。翌年十月開催の国会期成同盟会では、自由党の単独結成に反対し、中央と地方の連携を主張する。板垣退助や巖谷小波の沼間守一らに連合を説くも実らず、明治十五年十二月八日、選れて立憲改進党に入党する。十七年、県令三島通庸の「暴政」を政府に訴えようとしたが、加波山事件の連累者として疑われていることを知り、警視庁に出頭。佐野警察署に送られて収監される。十九年四月、県会議長に選出され、二期四年務める。明治二十二年(一八八九)二月十一日、大日本帝国憲法発布式に参列する。二十三年七月一日、第一回衆議院選挙で栃木県第三区より当選。こののち、議員辞職まで六回連続で当選する。初期議会における言論鋭い政府の「不正」追及は国会の名物で、「栃議」とあだ名された。二十四年十二月の第二回議会で、はじめて足尾銅山鉾毒問題をとりあげ、

れている。遺書はくろ所に保管された。『田中正造全集』全十九巻・別巻二(昭和五十二—五十五年、岩波書店)、『田中正造文纂』一・二(由井正臣・小松裕編、岩波文庫、平成十六年・十七年、岩波書店)がある。↑足尾銅山鉾毒事件 ↑谷中村強制買収問題

【参考文献】 林村二『田中正造の生涯』(講談社現代新書、三六六 講談社)、由井正臣『田中正造』(岩波新書、二五八 岩波書店)、小松裕『田中正造の近代』(2001、現代企画室)、花村富十郎『愛の人田中正造の生涯』(2007、随想舎) (小松 裕)



田中正造